

「こんがらかる・もつれる・からむ・からまる・からみつく」

加藤 久雄

## 1. 共通部分の確認

「こんがらかる」「もつれる」「からむ」「からまる」「からみつく」の五つの動詞は、次の文脈では類似した状態を表わす。

- (1) 糸が こんがらかり 糸口が わからなくなった。
- (2) 糸が もつれ 糸口が わからなくなった。
- (3) 糸が からみ 糸口が わからなくなった。
- (4) 糸が からまり 糸口が わからなくなった。
- (5) 糸が からみつき 糸口が わからなくなった。

このことから、「こんがらかる」「もつれる」「からむ」「からまる」「からみつく」には意味的に何らかの共通部分のあることが確認され、上記五つの動詞からなる類義語の組み合わせを設定することができる。(1)から(5)の用例で、それぞれの動詞に共通する意義特徴は(1)くものがそれ自身で入り組んだ状態になる。>という状態における変化上の共通性である。では、これらの五つの動詞は、意義特徴(1)のもとに全く同一であるかと言うとそうでもない。そこで、五つの動詞のさまざまな意味用法を検討することで五つの動詞の間にある示差的特徴を明確にし、それぞれの動詞の意義特徴を求めるとともに、基本的な意味用法についての意味論的な整理を試みてみたい。

### 1.1. 従来 of 記述

「こんがらかる」「もつれる」「からむ」「からまる」「からみつく」の五つの動詞の意味について従来の記述を見ておこう。まず、国立国語研究所(以下、国研と略す。)1964『分類語彙表』では、「2.155。合い・組み・解けなど」の見出しで上記五動詞は同じ項目に分類されている。国研1972『動詞の意味・用法の記述的研究』

は、上記五語のうち「もつれる」と「からまる」について比較をし、「もつれる」は、「一つのものが、あるいは2つ以上あっても同質のものが、いりくんだ状態になることをいい「からまる」は、同質のものどうしのばあいにも、また異質の対象に付着していりくんだ状態になるばあいにも、つかわれる。」(p.191)と記述している。さらに、類義性に着目し類義語の使いわけの説明・記述を目指した徳川宗賢・宮島達夫1972『類義語辞典』は、「からむ」の項で「からまる」との類義性にふれ、「どちらも、ほとんどおなじようにつかわれる。---(中略)---ただし、酒によったうえで「からむ」のは、「からまる」とはいえない。」と記述している。最後に身近な小型辞書の意味記載を見ておく。

こんからがる	もつれる	からむ	からまる	からみつく
もつれからまりあう。 紛糾する。 こんぐらがる。	(一)まわりつく。 からみ合て 入り乱れる。	(一)巻つく。 まとつく。 まつれる。	からみつく。 巻きつく。	(一)もの周囲に まきつく。
	(二)言語・動作が	(二)しこく難		(二)人にしこく
	正常さを失い、自 由でない。	疑を吹きか けて相手から はなれない。		いいがかりをつ ける。
	(三)色色と事情 がからんで混乱 し秩序を失う。			

(『岩波国語辞典』第2版1971.2)

以上従来の記述を見てみたが、国研1964、国研1972、徳川・宮島1972では、これら五語の類義性に着目していること。そして、後者二つは、その意味的差異についても十分ではないが記述があり示唆深い。辞書による記述は、一語一語の語義については正しく詳細な記述である。しかし五つの語の相互の意味的差異については明確でないようである。

## 2. 分析

五つの動詞の基本的な用法は、表1のように整理すること

ができる。

表1.

格を配列 係のあり 方 動 詞	Object	Object-Participant		Object-Participant	Agent-Participant
	(カ)	(ガ)・	(ニ)	(ガ)・ (ト)	(カ)・ (ニ)
ごんがらがる	(1)	(6)	×	(11)	×
もつれる	(2)	(7)	×	(12)	×
からむ	(3)	(8)		(13)	×
からまる	(4)	(9)		(14)	×
からみつく	(5)	(10)		(15)	×
				(20)	?

Object <動作の対象> Participant <動作の受け手>

Agent <動作主>

- (1) 糸が ごんがらがる。
- (2) 糸が もつれる。
- (3) 糸が からむ。
- (4) 糸が からまる。
- (5) 糸が からみつく。
- (6) ×タコ糸が 電線に ごんがらがる。
- (7) ×タコ糸が 電線に もつれる。
- (8) タコ糸が 電線に からむ。
- (9) タコ糸が 電線に からまる。
- (10) タコ糸が 電線に からみつく。
- (11) ×タコ糸が 電線と ごんがらがる。
- (12) ×タコ糸が 電線と もつれる。
- (13) ×タコ糸が 電線と からむ。
- (14) タコ糸が 電線と からまる。
- (15) ×タコ糸が 電線と からみつく。
- (16) ×太郎が 洋子に ごんがらがる。
- (17) ×太郎が 洋子に もつれる。
- (18) 太郎が 洋子に からむ。
- (19) ×太郎が 洋子に からまる。

(20) ? 太郎が 洋子に からみつく。

ここで格 (Case) による構文論の側からの分類をこたが、格の概念については、

動詞によってその共起関係のあり方をあらかじめ指定された名詞句の動詞に対する意味論的な関係のあり方

仁田 1973a, p. 103 (註1)

と定義された格の概念に従っておく。表1のように、格支配関係のあり方によって五つの動詞の用法を分類したのは、上記のように格を「意味論的な関係のあり方」と考えた場合、格を単なる統語素性 (syntactic feature) としてだけではなく、意味素性 (semantic feature) のひとつとして見なすこともできると考えるからである。

### 2.1. Object 一つの構文について

五つの動詞が Object (以下 O と略す) だけをとった場合について考察してみよう。表1の(1)から(5)が五つの動詞についてすべて文法的であることはすでに見たとおりである。そこで、O にたつ名詞をいろいろと取りかえてみよう。

- (21) 二本の糸が こんがらがる。
- (22) 二本の糸が もつれる。
- (23) 二本の糸が からむ。
- (24) 二本の糸が からまる。
- (25) 二本の糸が からみつく。
- (26) 99本の糸が こんがらがる。
- (27) 99本の糸が もつれる。
- (28) 99本の糸が からむ。
- (29) 99本の糸が からまる。
- (30) 99本の糸が からみつく。

(21) から(30) でわかるように、O にたつ名詞に対しての数量的な観点からは、五つの動詞は弁別することができない。

では数量にかわって質的な観点からはどうであろうか。(21)から(30)はいずれも具体物を表わす名詞を〇にしていたが、事態などを表わす抽象名詞を〇にした場合どうなるであろうか。

(31) ×話し合いが こんがらかる。

(32) 話し合いが もつれる。

(33) ×話し合いが からむ。

(34) ×話し合いが からまる。

(35) ×話し合いが からみつく。

(36) 頭の中が こんがらかる。

(37) ×頭の中が もつれる。

(38) ×頭の中が からむ。

(39) ×頭の中が からまる。

(40) ×頭の中が からみつく。

(41) 彼と養家との関係は 段々 こんがらかって来ました。

(42) 彼と養家との関係は 段々 もつれて来ました。

(43) ×彼と養家との関係は 段々 からんで来ました。

(44) ×彼と養家との関係は 段々 からまって来ました。

(45) ×彼と養家との関係は 段々 からみついて来ました。

(31)から(45)の例文によるテストから「からむ」「からまる」「からみつく」は、Object一つの構文において抽象名詞をそのObjectにとり得ないことが明らかになってきた。それに対して、「こんがらかる」「もつれる」は、(1)(2)(21)(22)(26)(27)で見たように、「糸」などの具体物を表わす名詞をObjectにとり得るし、また、(32)(36)(41)(42)などのように抽象名詞をもObjectにとり得る。このことから、これら五つの動詞を「からむ・からまる・からみつく」のグループと、「こんがらかる・もつれる」の二つのグループに分けることができる。また、このグループ分けは、表1の(6)から(15)でわかるよ

うに、「こんがらかる」と「もつれる」が Participantをとらないことから「からむ」「からまる」「からみつく」と区別されるその区別とパラレルである。(この対応が理論的にどう説明のつく現象であるかは、今回の考察では触れないでおく。単なるアクシデンタルなものであるかもしれない。)

では、(32)(36)(41)(42)からどのような意義特徴が示唆されるであろうか。まず、意義特徴(i)〈ものがそれ自身で入り組んだ状態になる。〉は、Objectにたつ名詞が具体物の場合であった。それゆえ意義特徴(i)には、〈ものが〉と明記した。そこで、(32)(36)(41)(42)の用例の意味から、意義特徴(ii)〈事柄が混乱し秩序を失った状態になる。〉を設定したい。では、「こんがらかる」と「もつれる」はともに意義特徴(i)(ii)を持ち意味用法もまったく同じであるかと言うと次のような用法の差がある。

- |           |         |           |         |
|-----------|---------|-----------|---------|
| (46) × 足が | こんがらかる。 | (51) × 舌が | こんがらかる。 |
| (47) 足が   | もつれる。   | (52) 舌が   | もつれる。   |
| (48) × 足が | からむ。    | (53) × 舌が | からむ。    |
| (49) × 足が | からまる。   | (54) × 舌が | からまる。   |
| (50) × 足が | からみつく。  | (55) × 舌が | からみつく。  |

(47)(52)は、意義特徴(i)〈ものがそれ自身で入り組んだ状態になる。〉でも(ii)〈事柄が混乱し秩序を失った状態になる。〉でも説明がつかない。「足」や「舌」は、実際に〈入り組んだ状態〉にあるわけではないし〈事柄〉でもないからである。そこで(47)(52)の用法の「もつれる」には独自の意義特徴を考えなければならない。(47)も(52)も、足の動作；舌の動作が不調で思うようにならないことを意味している。そこで、この意味をそのまま、意義特徴(iii)〈動作が不調で思うようにならない状態になる。〉として、「もつれる」の意義特徴に加えることにする。

以上 Object ひとつをとる構文において考察を進めたが、これですべてが解決したわけではない。例えば、「こんがらがる」は意義特徴 (i) を有していながら (31) が言えないこと。同じことが逆に「もつれる」では (37) が言えないことの説明がついていない。今のところこの差異をどのように整理したら良いのが成算がない。ひとつには、意義特徴 (i) をく入り組んだ状態における程度の観点からさらに細分化する方法がある。残された問題のひとつである。

## 2.2. Object - Participant の構文について

五つの動詞のうち、Object - Participant の構文をとる動詞は表 1 の (6) から (15) の用例でわかるように「からむ」「からまる」「からみつく」の三つの動詞である。この三つの動詞は、Pa にたつ名詞句の現われ方に「～に」(8)(9)(10) と「～と」(14) の二種類がある。この現象をどのように説明すべきであろうか。まず、Pa を表わす助詞の現われ方には、格に対する対称性の観点から、次の三つのパターンがある。(注2)

I 非対称動詞の Pa は「に」で表わされる。

例 ① 私が 彼に 本を 与える。

この場合 ① を「彼が私に本を与える。」とすると、論理的意味に変化が生ずる。

II 半対称動詞の Pa は「に」「と」で表わされる。

例 ② 太郎が 花子に 話す。

③ 太郎が 花子と 話す。

この場合 ② を「花子が太郎に話す。」とすると論理的意味に変化が生ずる。③ を「花子が太郎と話す。」としても、論理的意味に変化は生じない。

III 対称動詞の Pa は「と」で表わされる。

例 ④ 日本が アメリカと 戦う。

この場合 ④ を「アメリカが日本と戦う。」としても論理的意味に変化は生じない。

さて、この三分類は Pa がどのような助詞によって顕在化され表層の格として機能するかを見たものである。この分類に従って Pa をとる「からむ」「からまる」「からみつく」の三動詞を見てみると、「からむ」「からみつく」は、表 1 (8)(10)(13)(15) の用例でわかるように Pa に格助詞「に」しかとることができない。しかも、(8)(10) をそれぞれ

- (1) 電線が タコ糸に からむ。
- (2) 電線が タコ糸に からみつく。

とすると、その論理的意味が変化してしまう。これは上記の I の場合に相当し「からむ」「からみつく」は、非対称動詞と書くことになる。「からまる」は、表 1 の (9)(14) の用例でわかるように Pa に、格助詞「に」「と」をとる。その上、(9)(14) をそれぞれ

- (3) 電線が タコ糸に からまる。
- (4) 電線が タコ糸と からまる。

とすると、(3) は (9) で示された論理的意味とに違いが出るが、(4) は (14) で示された論理的意味と同じであると言う結果になる。これは、上記三分類の II の場合に相当し、「からまる」は、半対称動詞と書くことになる。前述したように、syntactic feature を semantic feature として認める立場を貫けば、「からむ」「からまる」「からみつく」のこれらの特徴を、これらの動詞の意義特徴として記述することも許されよう。そこで、「からむ」「からみつく」に、意義特徴 (iv) <非対称動詞>、「からまる」に意義特徴 (v) <半対称動詞> を与えておくことにする。

さて、「からむ」「からまる」「からみつく」の意義特徴はこれで十分かと言うとまだ十分ではない。この三動詞には、意義特徴 (i) <ものがそれ自身で入り組んだ状態になる。> が与えられていたが、表 1 の (8)(9)(10) のような用法がありこれらの用法は意義特徴 (i) では説明できない。しかし、(8)(9)

(10) の意味は、意義特徴(i)とまったく類似性のないものでもなく、(i)の〈それ自身〉を除き、〈ものが他のものに巻きついたり入り組んだ状態になる。〉を、意義特徴(vi)として設定することができよう。また、「からむ」「からまる」「からみつく」には、次のような用法がある。

(5) 領土問題が 日ソ漁業問題に からんでいる。

(6)? 領土問題が 日ソ漁業問題に からまっている。

(7)? 領土問題が 日ソ漁業問題に からみついている。

(6)(7)は(5)に比べると、ややすわりの悪さを感じさせるが、意味が通じない程でもない。(5)(6)(7)のような用法は、Objectにたつ名詞が〈もの〉ではなく〈事柄〉であり意義特徴(vi)では説明できない。先にObjectに〈事柄〉をとる構文でこれら三動詞に、意義特徴(ii)〈事柄が混乱し秩序を失った状態になる。〉を設定したが、(5)(6)(7)は、〈混乱し秩序を失った状態〉を意味しているわけでもない。そこで、(5)(6)(7)にあたる意義特徴を、(vii)〈事柄が別の事柄と関係を有する状況になる。〉と設定しておく。この意義特徴は、次のような例文など用法として一般的であるが、1.1.で見る限り、辞書類に明確に記述されていないようである。

(8) 以上のようないわば偶然的な事情がからまったためか、チョムスキー学説が心理学の世界に受容されるには、その後、なお数年を要した。

(「現代のイスプリ」No.85 p.6 至文堂1974.8)

(9) オリンピックに出場する以上、勝った方がいいに決まっているが、それに奇妙な悲壮感や、こわばった愛国主義が からまってくるのは好ましくない。

(『マンボウおもちゃ箱』p.41 北杜夫 新潮文庫1977.11)

以上が、Object - Participantの構文における考察であるが、「からむ」「からまる」「からみつく」の意義特徴が十分に記述できなかったわけではない。これら三動詞を、弁別する特徴を見出せないままであり、例えば、

(10) ボールは ピンまで 1メートルに からんで采ました。  
 (11) Xボールは ピンまで 1メートルに からまって采ました。  
 (12) Xボールは ピンまで 1メートルに からみついて采ました。  
 などのように、三動詞の間で用法に差のあるものについては、  
 意義特徴(IV)(V)(VI)(VII)では説明のしきれない部分が残って  
 いる。これらの問題については、今後、Object, Participant にた  
 つ名詞をいろいろと組み合わせ教々の例文を得てさらに考察  
 を深めていくつもりである。

### 2.3. Agent-Participantの構文について

五つの動詞のうち Agent-Participantの構文をとるのは、表1の  
 (16)から(20)の例文でわかるように(18)の「からむ」と(20)の  
 「からみつく」の二つである。

表1(18)=(1) 太郎が 洋子に からむ。

表1(20)=(2)? 太郎が 洋子に からみつく。

(2)に、「?」を付けたのは、(1)に比べると(2)は、表現としてす  
 わりの悪さを感じさせるからである。しかし、辞書などにも用  
 例として記載されていることがあり、「X」にはせず「?」を付け  
 た。これら(1)(2)の意味は、「人に言いかがりをつけてつきまど  
 う。しつこく無理難題を言って困らせる。」である。この意味は  
 これまでに記述してきた(1)から(VII)の意義特徴では十分説明す  
 ることができない。そこで、(1)(2)のこの意味を、「からむ」「からみ  
 つく」の意義特徴として加え、意義特徴(VIII)としたい。

その他、Agent-Participantの構文の用例としては、次のよう  
 なものがある。

(3) Xへびが 木に こんがらかる。

(4) Xへびが 木に もつれる。

(5) へびが 木に からむ。

(6) Xへびが 木に からまる。

(7) へびが 木に からみつく。

この用法は、意義特徴(VIII)では説明のつかないものであり、むしろ、表1の(8)(9)(10)の「タコ糸が 電線に からむ。/ からまる。/ からみつく。」の用法を説明した意義特徴(VI)「ものが他のものに巻きついたり入り組んだ状態になる。」に類似するものである。しかし、(VI)はO-Paの構文であることと、(5)(7)はA-Paの構文であることの違いがあり、また、「からまる」は、この場合(6)のように言えないところが、表1(9)とは異なっている。そこで、アドホックな解決ではあるが、「へびなどがものに巻きついたり入り組んだりする。」を意義特徴(IX)として設定しておきたい。

### 3. まとめ

以上の考察を表にしてまとめると次のとおりである。

- (I) ものがそれ自身で入り組んだ状態になる。
- (II) 事柄が混乱し秩序を失った状態になる。
- (III) 動作が不調で思うようにならない状態になる。
- (IV) 非対称動詞
- (V) 半対称動詞
- (VI) ものが他のものに巻きついたり入り組んだ状態になる。
- (VII) 事柄が別の事柄と関係を有する状況になる。
- (VIII) 人に言いがかりをつけてつきまとう。いかに無理難題を言って困らせる。
- (IX) へびなどがものに巻きついたり入り組んだりする。

意義特徴 動詞	Object			Object - Participant				Agent-Participant			
	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix		
ズンがらがる	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
もつれる	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-
からむ	+	+	-	+	+	-	+	+	+	+	+
からまる	+	+	-	+	-	+	+	+	-	-	-
からみつく	+	+	-	+	+	-	+	+	+	+	+

まだまだ満足のいく分析ではなく基本的な意味用法を整理

したにとどまっている。このような類義語の意味分析は、分析の対象となる語の意義特徴をその語と同一文脈に共起する他の語との相互関係のあり方から導き出すことによつて成立すると考える。同一文脈には、複合語、立の文章が理論的に考え得る。今回の考察では、文内部における相互関係しかみることができなかった。今後、Object, Participant, Agentのそれぞれの格にたつ名詞の分析、「こんがらかる」「もつれる」「からむ」「からまる」「からみつく」を用言として、それを修飾する連用修飾成分に対する分析等を含めて、より満足のいく考察にしたいと考えている。

#### 注

1. 仁田義雄 1973a 「日本語結合値文法序説 — 動詞文シンタクスの一つのモデル —」 国語学98 p.93-112 1974. 9
2. 仁田義雄 1973b 「対称動詞と半対称動詞と非対称動詞 — 格成分形成規則のために —」 国語学研究13 p.56-68 1974. 1

#### 参考文献

- 国立国語研究所 『分類語彙表』 1964 秀英出版
- 国立国語研究所 『動詞の意味・用法の記述的研究』 1972 秀英出版
- 徳川宗賢・宮島達夫 『類義語辞典』 1972 東京堂出版
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 『岩波国語辞典 第2版』 1971 岩波書店
- 日本大辞典刊行会 『日本国語大辞典』 1972-1976 小学館
- 柴田武他 『ことばの意味』 1976 平凡社

言語経歴： 1954年5月、名古屋市東区に生まれ、1977年3月まで名古屋。以後、横浜市港北区在住。